

A DEAN MESSAGE
学部長メッセージ

「学ぶ」ということ

国際教養学部長 安井 一郎

YASUI Ichiro
筑波大学(教育学修士)

■専門
教育課程、教科外教育

■担当科目
道徳教育の理論と実践
教育実習指導
教育課程論 等

主体的・対話的で深い学び

2017年3月及び2018年3月に改訂された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められています。「主体的・対話的で深い学び」とはどのような学びでしょうか。『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編』には、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもつて粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに

考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める『対話的な学び』、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』(1)と説明されています。学校では、学習指導要領に基づいた日々の教育活動を通じて、このような学びを実現することが求められています。しかし、そこには「主体的な学びを」させる『矛盾』(2)があることは否定できません。

ん。そもそも「学ぶ」ということはどういうことでしょうか。

最も重要なのはモチベーション

2000年代初頭に学力世界一と言われたフィンランドの教育改革を担ったオッリペッカ・ハイノネンは、「教育には自由が欠かせない」として、次のように述べています。「学ぶということは大変繊細で、個人的で、また非常に複雑な事柄です。〔中略〕最も重要なのはモチベーションです。教師の意欲、生徒の学習意欲、それこそが核心なのです。厳しく管理すれば、モチベーションが失われ、結局何もかもがだめになってしまいます。〔3〕また、〔ここで重要なのは、人はそれぞれ違うということを理解することです。学習の仕方も人それぞれなのです。学習意欲がどこから湧くかについても、人それぞれ違います。様々なアプローチの仕方を考慮すべきです。〕とも述べています。〔4〕主体的・対話的で深い学びとは、学びの型を意味するものではありません。他者との協働によって、自身自身を「生きた」ということ。「い」の方から湧き出るモチベーションに裏づけられた誰のものでもない自分自身の「学びを創る」ということを意味しているのです。

学びとはかわるゝ

宮城教育大学元学長の林竹二は、次のように述べています。「学ぶ」ということは、

覚えこむことは全くちがったことだ。

学ぶとは、いつでも、何かがはじまることで、終わることのない過程に一步ふみこむことである。一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないのか。学んだことの証はただ一つで、何かがかわることである。〔5〕このことは、「大学は学問を通じての人間形成の場である」という本学の建学の理念にも通じています。林は、「学は学ぶこと―自分の在り方を変える努力であり、〔問〕は問い続けること、追求めること、〔い〕ずれにしても、どこまでも自主的で継続的な努力を抜きにしては成り立ちません。〔6〕と述べています。問い続け、追い求めることで、自分の在り方を変える、すなわち、未知のものに挑戦し、自分の可能性を信じ、新たな自分を築いていこうとする意思と能力を持つこと、それが「学ぶ」ということであり、「大学は学問を通じての人間形成の場である」ということの意味ではないでしょうか。大学4年間を通じて、そのような学びを創り上げていくべきです。

- (1) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」(東山書房、2018、78ページ)
- (2) 『主体的な学びを「させる」矛盾』(『内外教育』第60号、41号、2019、20ページ)
- (3) オッリペッカ・ハイノネン、佐藤学「学力世界一」がもたすもの(SNHKK出版、2007、26、27ページ)
- (4) 同上書64ページ
- (5) 林竹二「教育とは」と『国土社』、1000000、105、106ページ
- (6) 林竹二「学ばせたい」と『国土社』、1977、8、59ページ